



定住外国人子ども奨学金 News Letter

※定住外国人子ども奨学金ニュースレターWeb版は個人情報などの都合上、内容を一部変更しています。

「第7回 KOBE カンタービレ・コンサート開催！」

第7回カンタービレ・コンサートを2015年10月31日(土)に新長田ピフレホールにて、開催しました。これは、収益を奨学金の原資にすること、外国人の子どもの課題について知る機会の少ない人たちに音楽を通じて広く知っていただくことを目的に開催しているチャリティコンサートです。これまではずっとクラシックだったのですが、今回は初めてのJAZZとなりました。

はじめに、甲南高等学校・中学校ブラスアンサンブル部によるJAZZの演奏がありました。これまでJAZZで数々の賞を取られている学校ということで、「迫力がありとても良かった」、「男子中・高校生が一生懸命な様子が可愛かった」などのご感想をいただきました。

次にH実行委員長のあいさつの後、N委員の司会進行により、奨学生が自己紹介をしました。みな堂々と母語を交えて、自己紹介をしてくれました。



そして、メインの出演者である神戸の若手JAZZミュージシャンAさん率いる5名の方たちによる「枯葉」やディズニーの白雪姫の曲「そして王子様が」などの演奏が始まりました。まさにプロ！素晴らしい演奏でした。

そして、奨学生の2回目の登壇です。時間が押していたこともあり、予定をだいぶ短くして、主に勉強について頑張っていることなどを話してもらいました。今回は土曜日ということもあり、模試や部活の試合など学校行事と重なり欠席する奨学生が多かったため、事前に自己紹介DVDを作成し、休憩時間に上映しました。DVD作成にあたっては、Mさんに企画からインタビュー作成まで全てをお願いしました。多くの時間を割いて作成のご協力をいただき、同じような背景を持つ先輩として彼らの声を引き出していただけたおかげで、奨学生の頑張っている様子やいい表情を観ていただけたのではないかと思います。

今回は新機軸の試みがいくつもあったので少し不安もあったのですが、当日の参加者は277名とこれまでで1番多くの方にお越しいただくことができました。たくさんの方のご協力をいただき、おかげさまで約100万円を奨学金とさせていただくことができました。この場を借りて、ご出演者の皆様、甲南高等学校・中学校関係者のみなさま、今回も司会をさせていただいたY様、Mさん、その他ご協力いただいた団体・個人のみなさまにお礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

(事務局 S.Y.)

奨学生からのメッセージ

奨学生には自分でテーマを決めて作文を書いてもらいました。

Kさん (8 期生)

「僕の高校 1 年目」

今年は義務教育である中学校を卒業し、未来の夢を叶えるために自分で決めて選んだ高校へ入学出来た年でした。

合格発表の時にもらった課題の内容に少し戸惑いを感じながら、制服の採寸でドキドキワクワクし、そして入学式当日には「この学校で 3 年間頑張るぞ！」と意気込みをもって、高校生活をスタートさせました。ですが、入学してみると中学時代の 7 倍もの通学時間の長さに疲れ、勉強の課題の多さに苦勞し、環境の変化になかなか慣れず、とてもしんどい思いをしました。特に授業の中で難しいと感じたのは、理数教科です。数学が数学 I・数学 A と分かれているところや、理科が生物基礎・化学基礎に分かれていることに頭が痛くなり、毎日理解するのに必死でした。今は授業にも慣れ、分からないところを積極的に先生に聞きに行き、問題を解決し、小テストでは合格を 8 割ほど取れるようになりました。

少し授業に慣れた頃の 6 月に文化祭がありました。我が校の文化祭は舞台に力を入れており、外部から機材を搬入し、ステージを作り発表していきます。僕達 1 年生は歌を披露しました。華やかなライトに照らされて歌った歌は惜しくも優勝を逃しましたが、いい緊張をもって歌い上げれたと思います。

夏休みの間もゆっくり家で過ごすこともなく、吹奏楽部の活動ではほぼ毎日学校へ通いました。7 月末のコンクールや、地域の行事への参加、市の吹奏楽祭の練習など忙しい夏休みでしたが、中学時代の友人とも遊ぶことが出来たので、初めての高校生の夏休みは十分に楽しめたと思います。

2 学期が始まってからは体育大会の練習となり、まだ暑さも残っているなかクラスみんなで頑張って練習をしました。体育大会当日は残念ながら雨でしたが、その雨の中、応援合戦という名の「ダンス対決」をみんなで踊りきった時の達成感は今までの暑さを一瞬で吹き飛ばすものでした。とても気持ちよく踊れました。

高校 1 年目で先輩や先生と深く関わりを持つことが出来たので、今後の学校生活がより一層楽しみになりました。

Bさん (8 期生)

「学校生活について」

僕は高校生になった時に、1 学年 7 クラスもあって人付き合いがしっかりできるか不安でした。でも僕のクラスはみんなが明るくてとても楽しいです。学校行事ごとにクラスメイトとより仲良くなることができました。学校行事は合唱コンクールや文化祭、体育祭や自分のオススメの本を紹介して投票をするビブリオバトル等がありました。その中でも特に僕が印象に残っているのは合唱コンクール

とビブリオバトルです。

合唱コンクールでは、僕は審査員をしました。クラスでの合唱はディズニーのアラジンで出てくる有名な曲をしました。僕は小学校の頃から歌うことが大好きだったので、合唱コンクールではクラスのみみんなの力になることができるとてもうれしかったです。アラジンの曲をみんなで歌う練習を通して、普段の学校生活では知ることができないようなクラスメイトの特技を知ることができたりしました。アラジンの曲は男子の方は低い音を担当するのでよく女子の方につられたりするのですが、男子全員が歌のうまい子に集まって大きな声で歌おうとしていたので、僕はこのクラスの一員になることができるとてもうれしく思いました。優勝することはできませんでしたが、クラスメイトとより仲良くなれたのでよかったです。

ビブリオバトルは高校生になってから初めて体験しました。Y 高校ではまずクラスをいくつかの班に分けてお互いに本を紹介します。その班の中でもっとも紹介が上手だった子が一人選ばれて、今度はクラスの中で紹介をします。そしてクラスのみみんなで投票をしてクラス代表を決定します。学年発表などは 1 月頃におこなわれる予定です。僕はこのビブリオバトルでシャーロック・ホームズの冒険（短編集）を紹介しました。班での発表の時に班の子達がうまく質問などしてくれたので自分でも信じられないくらいリラックスして紹介することができました。それで班の代表に選ばれてクラスで本を紹介することになりました。自分の番が回って来るとうまく紹介できるか不安でしたが近くの席の子が「大丈夫、大丈夫、うまくいくよ」と言ってくれたのでかなりリラックスして紹介することができました。本の紹介は地味でおもしろくないと思う人もいますが、僕のいるクラスでは発表の時に笑い合ったり、ツッコミが入ったりしてとても盛り上がりました。投票の結果は 16 対 16 で僕ともう一人の子が同票になりました。その後ジャンケンをしたらあいこが 4 回連続でおこったりして盛り上がりました。結果は僕の負けでしたがとても楽しかったです。あまり話したことのない友達とも仲良くなることができました。

このビブリオバトルを通して僕は紹介することの難しさと楽しさを知ることができました。何かを上手に伝えられるようがんばります。

D さん (8 期生)

「学校生活」

前回作文を書いたときも、学校生活について書きました。あのときは、高校に入ったばかりで、何もわからなくて、「毎日学校と部活が楽しすぎて、しかたがない」と書きました。入学してからもう半年以上過ぎました。今の現状を作文に書くと、前回書いた内容と変わります。もちろん学校は楽しいですが、“楽しい” だけではなくりました。

まず一番変わったのは部活でした。私はカヌー部に入っていますが、最初は人数が多くて、わいわいしていて、にぎやかでした。でもきつい練習が増え、先輩方も厳しくなり、勉強の両立ができなくなったせいか、もともと 1 年生が 16 人いたのに、気づいたら 11 人になってしまいました。私はとてもショックでした。最初は 1 年生で目標を考えたときに、「みんなで、16 人でインターハイに行こう」と決めました。でも上手くいきませんでした。部員の中で意見が合わなかったりして、何回かもめたりもしました。周りの子がやめていく中で、私は 3 年間つづけられるのかなと不安になりました。でも、私は中学校のときに部活を途中でやめてしまったので、高校では、何があっても、カヌー部はぜったいにやめないと決意して入部しました。だから、私は 10 月にあった大会に向けて、すごくがん

ばりました。朝練習は毎日行くようにして、筋トレをがんばってやりました。でも、人数が少なくなかったため、ライバル意識が出てきて、周りの子がどんどん上手くなっていくのに、私だけ置いていかれそうで、こわかったです。私も負けたくなかったです。でも、大会でも、ぜんぜん結果を残せなくて、本当に悔しかったです。大会の反省をいかして、冬の練習をがんばらないといけなと思っています。もう 1 つ変わったことは、考え事がたくさん増えたことです。今、自分は何をやっているのか、何をすべきか、何の意味があるのか考えてしまい、どうしても答えが見つからなくて、もやもやする気持ちが消えないです。夢も目標もあります。周りの大人がみんな違うことを言ったり、反対されることもあります。また、やりたい事が多すぎて、何から手をつけたら良いのかわからなくなってしまう。何か行動しないといけないと思うほど、気持ちが焦ってしまいます。そして、何より、一番悩んでいるのは、進路と勉強です。冬休みの間に、ちょっと気持ちの整理が必要だなと思いました。

I さん (7 期生)

「一人と思う時こそ、一人じゃない」

海外研修、これは私が所属する学校において一大行事であります。私たちは、高校 1 年から 2 年の 10 月までに、約 1 年半の時間をかけて、自分が行きたい国を選び、その国のことについて調べ、準備を重ねてきました。そして、私はイギリスを選びました。

初めての異国でのホームステイに対してとても楽しみな気持ちでいっぱいでしたが、一方で、不安な気持ちもいっぱいでした。

旅の始まりは伊丹空港でした。一部の人たちはイギリスに行きたい気持ちが抑えられなかったのか、集合時間より 1 時間半程早く来ました。私は、地元のバスの始発に乗ってギリギリの時間につきました。やっと、全員が集まり、手続きなどに進み、いざ出発です。すると、いきなり、私たちの内の一人が荷物検査で引っかかり、私は今回の旅に対して、もっと不安を感じました。緊張感が少し蔓延している中、チケットを落とした人も一人現れました。私は、より一層緊張し始めました。ある友達はその様子を見て、私の不安を和らげるように話をしてくれました。この時に、私はこれまでに感じていた友情というものを改めて感じました。この旅を通して、私にとって一番の収穫は、より大切な友情を得られたことです。

飛行機内で、みんなは、今回の研修に対して心配な表情は浮かべていないように見えますが、みんなはただ自分自身の不安で身近な人に影響を与えたくないからです。そして、何 10 時間の飛行時間を終えて、私たちはヒースロー空港に着きました。空港についてから、周りを見ると、いつも見慣れている看板や人種、日本語はなく、新鮮に感じ、とても感動しました。空港で、私は初めてポンドを使って、飲みものを買いました。ポンドはたくさん種類があつて驚きましたが、私はそれを見てとても興奮しました。色々な面で新鮮味を感じ、イギリスという濃い雰囲気包まれた私は、やっと不安から抜け、今回の研修が自分を磨くチャンスだと思いました。

ホストファミリーと初対面したのは、イギリスについた当日の夜でした。私たちはホストファミリーと待ち合わせをする所でバスの中で待機しました。初対面の人と会うのはとても緊張して、かつ 4 日も一緒に過ごすのは考えるだけで不安でした。バス内の人が 1 人ずつ、先生に呼ばれ、降りていく中、私の名前はなかなか呼ばれませんでした。私は、姿を消していく友達を見て、とても不安感を持ち、手が震えました。しかし、友達と話していく中で不安も和らぎました。ここでも、私は友情の大

切さを感じ、今回の海外研修では、友情という掛けがえのない大きなものを得た気がして、とてもうれしかったです。

私は、出発する前から、今回海外研修で、うまく英語でコミュニケーションをとれるかどうか心配していました。しかし、ホストファミリーと過ごして行く中で、私は、例えわからない言葉などがあっても、私たちのコミュニケーションを妨げるようなことはないとわかりました。私たちは、ジェスチャーや仕草でコミュニケーションをとることができます。私は、このようなことについてちゃんと確認してきました。しかし、文化の違いとしては、日本と違った習慣や観点がありました。例えば、料理面では、日本料理と違って、多めで、味付けがとても濃くて、野菜が少ないです。そのうえ、サラダにドレッシングもついてなく、戸惑うことばかりでした。しかしながら、今回のホームステイで分かったことは、たとえ国や人種、文化が違っていても、人と人との付き合いにおいて、人のやさしさというものは国境を超えるパスポートでもあるとわかりました。

とても充実した旅だったので、勉強の意欲も上がった気がしました。

Sさん (7 期生)

「私のすべきこと」

S 高校の理系は理一と理二に分けられています。私は理二のクラスに所属しています。理二クラスは全 8 クラスの内 1 クラスしか設けられておらず、他クラスよりも授業時間が 1 時間多く、その時間で様々な実験を行っています。また、理二クラスには他クラスよりも賢い生徒が比較的多く、定期考査の順位では 1 桁台の 8 割を理二が独占する勢いです。そんな中では正直、私は賢いほうではありません。どちらかと言うと下の方になることもあります。だから、毎日どのようにすれば周りに勝てるのか考えています。学校から出された課題を 2 回はするようにしています。でも私には理解力が足りないのか、じっくりこつこつと勉強に取り組む内に時間が足りず、考査期間に入ってしまいます。他のみんなは部活動にも励む中、どうして自分はその人達に負けてしまうのか、とても悔しく、毎日悩んでいます。家計も他の人よりも苦しく、毎日が我慢の連続で辛く思うことが多々あります。

でもある日、私が友達に元気がないことを心配して先生に相談した時、同じクラスの友達みんなが悩みが無いことは無いと知ることになりました。それぞれみんなの悩みや苦しみを先生は「誰にも言っては駄目だよ」と言って教えてくれました。その中にはショックを受けるようなものもありました。私はその時、本当に悩みのない人はいないことを痛感することが出来ました。

また、私の友達でとても自由な考えを持った人がいます。その人は周りの先入観に捕らわれない自分の考えをしっかりと持ち、その人自身も「自分の考えは甘いつて知ってる。でも人生は 1 度だけだし自分のものだから絶対後悔したくない。綺麗事のようなかもしれない。でも周りからどう言われても自分は自分の道を生きたい。」とっていました。社会は安定を求め、世間は名誉を求めます。私も安定した、悩みができる限り少ない毎日を手に入れる為に日々努力しています。社会から認められ、金銭面に悩まず、良い人間関係を築くことが自分の為であり、そうならなければならないと思っていました。それに対し、この友達の考えは安定のないもので社会の目から言えば社会の厳しさを知らない馬鹿らしい考えかもしれません。でも、その方が日々新鮮な刺激を感じ、人生を充実した濃いものにしていくことが出来るかもしれないと思いました。世の中には本当に多様な考えに溢れており、努力をする限りは報われるように出来ていると思います。だから、今の私にできることは自分のできる限りの努力をし、結果がどうなろうと、前に進み、それに対して後悔をしないことだと思いました。

Jさん (7 期生)**「ホームはどこ？」**

ALTの先生と「文化」について話している時、あることを質問された。

「あなたのホームはどこだと思う？」

その突然の質問に私は驚いた。私がフィリピンから来た移民だということを、1年前の私なら正直に言っただろう。しかしここ最近、私は自分自身はその質問に混乱し、迷い始めていることに気がついた。

サードカルチャーキッズ (TCK : third culture kid) は、成長期の重大な時期に、親とは異なる文化で育てられた子どもを指す。ALTの先生は、私にその言葉を教えてくれた。彼もまた、子どもの時に同じジレンマを経験していたのである。そのために、彼も自分の所属というものに疑問を感じていた。彼は中国人の両親をもつものの、アメリカのインディアナ州で育てられた。そして彼は自らをTCKと自己認識するようになった。TCKやその経験をもつ大人を支援する「TCKid」というNPOによれば、移民の子どもたちはTCKコミュニティを形成する大規模グループの1つである。

前にも述べたように、私はTCKという言葉さえ知らなかったので、自らをTCKだと認識したことは一度もなかった。しかしながら、私は昨年夏にフィリピンを訪れ、自分自身のアイデンティティに対する考え方が変化していることに気がついたのである。私は地元の人間というよりむしろ、ひとりの外国人として扱われ、その反応は私の期待するものでは全くなく、とても疎外されていると感じた。私から無意識に出るお辞儀やちょっとした独特な言葉遣いが、あちこちで人々を驚かせてしまったのである。

これは、TCKの子どもがもつ問題なのだろうか？

社会に何を伝えたら、TCKについて理解してもらえるのだろうか。

私はTCKとしての自分を紹介するのに行き詰まってしまった。

理解してもらうためには、どのようにしてTCKの議論を活性化させたいのだろうか。

そのためにも私は私自身の心の変化を説明する言葉が必要だと感じた。

移民は母国に再統合していくことが難しいと気づく。

この作文に説得力を持たせるために、私は自分の経験の多くをこの作文に書きたい。

私の中の議論が始まった。私は帰国子女もTCKと同じような問題があると考えている。

私は日本に来て、移民の子どもとして、初めて会う人に自分自身を外国人として紹介することを学んだ。私は外国人として自分をみなしたのである。そして私自身がある文化につながっていると気づくまでに、何年もの時間が過ぎていた。ある文化というのは、日本の文化にである。人生の大部分をフィリピンで過ごしてきたのだけれど。

昨年夏、「ホーム」に帰った時に、私は、そのつながりが明白なものだと気付いた。

私は、自分がほんの少し疎外されていると感じたのである。「ホーム」に帰ったとはいうものの、私は外国人だと捉えられていた。私と関わる人々とは何か違うものがあったからである。私は突然の現

実に動じてしまった。私は日本の文化に強くつながっていたことに気付いたのである。もう、この生き方でやっていかざるを得ない。

私は日本人らしさを身につけてきたようだ。フィリピンの生活より、日本の生活の方が好きだということに気付いた。そして、フィリピン人からは私が日本のほうが好きだということに怒られた。私は自分自身の所属が分からなかった。私には当てはまるカテゴリーがまったくなかった。だからこそ、TCKという言葉に出会えてうれしく思った。それは白黒つくことではなく、むしろ複雑である。このことを認識することは、私のような者にとって、さらに多くのことをもたらす。

日本でTCKや帰国子女を育てよう。

さて、みなさんは、どうやってグローバル人材を育てますか？

Kさん (6 期生)

「雨ニモマケズ脅威ニモマケズ」

人はなぜ争い傷つけ合うのでしょうか。そもそも、争いは何のためなのでしょう。地球上の生物は、常に争うことによって生きています。それは、食料、住居そして子孫を残すためです。つまり、生きるために必要不可欠なものを守るために争い傷つけ合うのです。人にとって必要不可欠なものとは何でしょうか。私は、それが衣・食・住だと思っています。宮澤賢治の「雨ニモマケズ」という詩にはこう書いてあります。食に関しては、「一日ニ玄米四合ト少シノ野菜ヲタベ」と。現代では、当時よりエネルギーを使うので「一切レノ肉ト一尾ノ魚」も加えるとしましょう。住に関しては、「小サナ萱ヅキノ小屋ニキテ」と。平成 28 年に萱はあまりにも粗末なので、「コンクリート」の方が良いですね。小屋の方が今では高いので、「マンション」になります。衣については書いてありませんが、多くなくても生活していける量で十分だと思います。これらは、人にとって生きていくのに必要不可欠なものです。人は今、これらのために争い傷つけ合っているのでしょうか。私はそうは思いません。復讐・報復や支配のためのように見えます。「目には目で、歯には歯で」という考え方によるものではないのでしょうか。この考え方では憎しみの連鎖が生まれてしまいます。それを絶たなければ平和には近づけないと思います。

私が好きな「ナルト疾風伝」というアニメに次のような言葉が出てきます。「平和、そこへ行く方法はまだ俺にもわかりません。いつか俺がこの呪いを解いてみせます。平和というのがあるなら俺が掴みとってみせます。方法より大切なこと、ようはそれを信じる力。」これはナルトの兄弟子が 2 人の師に対して言った台詞です。「この呪い」というのは、憎しみの連鎖のことです。たかがアニメの中の話と思うかもしれませんが、しかし、世界中の人がこのように思えばいつか平和にたどりつくかもしれません。先日のフランスでのテロの数日後、テロで妻をなくした男性のメッセージが話題になりました。その中に「私は君たちに憎しみの贈り物をあげない。君たちはそれを望んだのだらうが、怒りで憎しみに応えるのは、君たちと同じ無知に屈することになる。」という言葉があります。この言葉こそが、今世界に必要なことではないのでしょうか。「やられたらやり返す。倍返しだ。」などと言っている場合ではないのです。全ての人が「呪いを自分が解いてみせる。」という強い意志を持てば、今より少し平和というものが見えてくると思います。つまり、現代の人々には、雨、風や雪そして夏の暑さだけではなく、「憎しみニモマケズ、脅威ニモマケズ」ことが求められているのではないのでしょうか。

Nさん (6 期生)**「自立すること」**

大学生は社会人になる一步手前である。そのため、大学生は卒業すれば社会の一員になるということを実感して、行動すべきだ。

大学生は自分たちで受ける授業を選び、さらに時間割も決め、常に自ら考えて行動している。なぜなら今までのように先生が用意してくれたり、親が事前に言ってくれたりするようなことはなく、自分で考えて行動しなければならない。これはまさに社会人としての自立力だ。人に頼らずに、自分で考えて、計画を立てて、行動するということが大切だ。しかし、現代社会では大学を卒業し、社会人になったにもかかわらず、こういったことができない人もいる。なので、私は自分から考えて、行動できる人になりたい。当然未熟な部分が多く、失敗することもあるだろう。しかし、失敗したとしても、努力したことは事実である以上、何かプラスのものが得られるはずだ。

私は将来、社会に貢献できる人になりたい。そのため、大学では、専門的な知識を身につけたい。さらに、高校で部活動をしなかった代わりに大学のサークルに入りたい。また、アルバイトをして、様々な人と出会い、かかわることによって、社会経験をしたい。

経済面では自立することは難しいが、人としては自立したい。自分の力で、いい結果が残るように物事に精一杯取り組みたい。と言っても、まだまだ子供の部分はたくさんあるだろう。しかし、「大人になる」あるいは「社会人になる」ことを意識して、行動することが重要ではないだろうか。

大学で一番学ばなければならないのは、勉強というよりむしろ「人間力」だ。

Yさん (6 期生)**「第一志望」**

この作文を書いている今日でセンター試験まで 50 日を切りました。学校で受ける最後の模試で、第一志望校の判定が悪くてがっかりして、勉強もはかどりませんでした。同じ志望校の友達の成績は伸びてきているのに、このままでは自分だけ合格できないことばかり考えてしまいます。来週には、高校生活最後の定期考査があり、終わり次第センター対策特別編成授業になります。このまま落ち込んでいても仕方がないので、理科の 2 次対策をしつつ、センター試験に全力を注いでいきたいです。

受験が近いということもあり、学校で息を抜くことはできず疲れることもあるので、たまにある先生の雑談が面白かったりします。

古典の先生は 2 週間ほど前に松葉杖で教室に入ってきて、そうなった経緯を授業 1 時間使って話しました。現代文の先生は、大学院で哲学を学ぶほど哲学が好きで、評論や小説文の作者や登場人物の行動から伺えるダメな性格と、彼自身を重ね合わせて、論理的かつ客観的に批判する所や哲学的な思考がひらける点で面白いです。

毎回授業を受けると先生が、哲学がいかに好きなのかが伝わってきてうらやましいです。哲学なんて、どういう仕事で役に立つかわかりませんが、大学で自分の好きなことを勉強できた先生は本当に幸せ者だと思います。

この先生はよく、理系は特に大学ではなく、大学院に行って学ぶことが大切だと言います。日本は

大学が多く、それぞれの大学の何が良いのかが、調べてもよく分かりません。浪人してでも、絶対ここに行きたいと、強い意志をもつことの出来る要素を見つけることが出来ません。それに、模試の結果が悪く、今では受験校を変えるべきかと悩んでいます。

来月おわり頃に、5年ぶりに兄が日本に帰ってきます。兄は現在ペルーで大学4年生です。この長い間、厚い信頼をおいている兄と2人でゆっくりと話すことができなかつたので、また会うのが楽しみです。いろんな面で自分を支えてくれた兄で大学生の兄が、自分にどうアドバイスをしてくれるかが気になります。いずれにしろ、今出来ることは、あきらめず勉強することだけです。